

闇があった。

闇の中に闇があった。

己を認識し、世界を認識し、差し込む日差しにまぶしさを感じたとき。

それはそこにあった。

闇の中から闇が生まれた。

私はそこにいた。この広い館の中に、一人たたずんでいた。誰もいない古ぼけた館。私だけの大きな館。

一人でいるには広すぎるが、そう退屈はしなかった。幸いにしてここの書庫には暇を潰せるだけの本が置いてある。

学書、文芸書、美術書に、そして夢物語。

そう、かなうことのない夢のような物語。

一日を本と共に過ごす。ただそれだけの毎日。

だが、ときにうろんな客が入り込む。騒がしくも無粋な客人はそれぞれの目的で私の元へやってくる。

あれらは言う。

私の命と引き換えに富と名声、そしてちっぽけな安息が得られるのだと。

撫でるだけで崩れ落ちるあれらは、それでも私につかの間の起伏を与えてくれた。

私を化け物と呼んだあれらは、自分たちの存在を人間と言った。

どれだけの時間を私はこの館で過ごしたのだろうか。読

み 終えた本が山と積まれ、私は退屈だった。

今でもあれらはやってくる。だが、それに意味を見いだせたのもほんのわずかの間だけだった。

鉄の杭を胸に突き立て、銀の剣で首を撥ね、神秘の水を振り掛けて、十字架を胸に神に祈る。

なにを思ってそんな無駄な行為に励むのだろうか。私自身、自分がどうすれば死ぬのかも知らないというのに。

そんなあれらを手にかけるのもさすがに飽きた。同じことの繰り返しだ。

人間とは、こんなにもつまらない生き物なのだろうか。

あれらの記した本の数々はあんなにも私を楽しませてくれたのに、不思議なものだ。

そして今も、一人の人間がやってくる。

暗がりのなかをおっかなびっくり手探りで歩きながら、ここやってくる。

忍び足で扉の前に立ち、一呼吸して扉を蹴破り蛮勇を奮う。

彼も、彼女も、きっとそうなのだろう。

コンコンコンコン

——なんだ？

コンコンコンコン

——なにをしている？

コンコンコンコン

——そういうことなのか？

「鍵ならかかってないぞ」

私とて礼儀やマナーを知らないわけではないが、それはこの状況で求められることなのだろうか。

まあ、ノックされたんだから応えようじゃないか。

「ああ、これはどうも失礼します」

軽い返事のその男は、態度もそうだがずいぶんと変わった顔をしていた。顔が、というよりは顔つきが今までの人間とは違っていた。

「さて、私になにか御用かな、お客人」

「この館におっかない怪物がいるって話なんですがね、お嬢さんご存じで？」

白々しい。うさんくさい。これがあれらの言う駆け引きというやつなのか。

「ここには私しかいないよ」

「あらまあやっぱり？ 村のおじいさんは子供の頃に父親を殺されたって言っていたけれど、そんな年には見えないものでね」

男はあたりを見回し手近な椅子を見つけると、くるりと回して逆座りに腰をおろした。

「いえね、たまたまふらっとここの村に立ち寄ったら、怪物がいるから退治……いや、殺してくれと頼まれましてね」

「それで、殺しに来たと？」

「そういうことになるんですがね、前金までもらっておいて村の人たちには悪いんだけど、ボクにそんな気はないんだ」

「なら、どうして？」

その男はじっと私の顔を見る。

「面白そうだったからさ」

「面白そう？」

「そう、面白そうだから」

好奇心、探究心と言われているものか。

この男はそれを満たすために自分がどれだけの危険を冒しているのか理解しているのだろうか。

「お嬢さん、君、退屈だろ？」

男は立ち上がり、私の前に歩み寄る。

「……なにを言っている？」

「こんな所に何十年もたった一人でいて、君は退屈じゃないのかい？」

そうだ。その通りだ。私は退屈だ。あり余る時間をどうする事もできずに持て余している。

だが、それがなんだというのだ。

「そんなに退屈なら、どうしてここにずっといるんだい？」

うなづく私に男は尚も問いかける。

どうしてここにいるのか？ それは簡単な、とても簡単なことだ。

そんな事は思いもしなかった。ここから出ようという考えが私に浮かばなかったのだ。

……違う。

本当は知っている。

私はこの館に縛られている。見えないなにかが、心の奥で私を縛りつけている。

だからこそその夢物語。

私を殺しに来る人間はいても、私の手を取る人間などいないのだから。

「……なにかここにいなきやいけない理由でもあるのかい？」

黙りこくる私に男が話しかける。

私はしばし考え、首を横に振る。

そうだ、こんなところにいる理由など、ないのだ。

「なら決まりだ。お嬢さん、ボクと一緒に旅をしないか？」

「お前と一緒に？」

「そうそう。ボクはこう見えても旅人でね、国を出ているいろなところを旅して回っているんだ」

村の外にはもっと広い世界があるとは知っていたが、なるほど違う国ときたか。

顔つきが違うのもそういうことか。

「この人たちだってようは君がいなくなってくれれば問題ないんだろ？　ボクとしてももらうものはもらった以上やることはやらないとね」

そう言うなり男は私に手を差し出した。

私は、その手を、しっかりと握った。

そうだ、こんな話を幾度か読んだ。

囚われのお姫様を救い出す王子様。

もっとも、今手を引かれているのはどちらかと言えば倒される側の化け物だったりするが。こいつもこいつで白馬の似合わなさそうなきえない優男だ。

事実は小説よりも奇なりとは言ったものだが、それでも、この手を握っていると心が軽くなる。一步一步と進むたびに見えない鎖が砕けていくようだ。

このシルヴァンドルは私になにをもたらししてくれるのか。

霧が立ち込め、薄暗がりの門出は物語の始まりには相応しい。

ハッピーエンドは望まないが、意味のある足跡を残したいものだ。

「君と迎えられた今日という日に」

この気障な振る舞いにつき合ってやるのもしゃくだが、今日くらいは乗ってやろう。

長い長い旅路の終わりだ。そんな気にもなるさ。

グラスを合わせ、注がれたワインを一口で飲み干す。匂いや色を楽しむなんてまどろっこしいのは性に合わない。

あの日こいつに手を引かれて旅に出たときはどうなるかと思ったが、まさかこんなにも退屈しない毎日をおくれるとは思わなかったよ。

暇だろう？　と言うからつき合ってやれば、デート先はわなだらけの太古の遺跡。

退屈だろう？　と言うからついていってみれば、今度は鬼の巣くう未開の地。

なかなか刺激的な冒険小説じゃないか。微かに求めたロマンスは今じゃ血の池に沈んで息もしていない、

今日という日もまた新たな旅路の始まりでしかない。

王子様が命知らずのコロンブスだったとはね。

「いやはや今回もハードな冒険だった。体中が痛いよ」

「年寄りにはもうキツいんじゃないのか？」

「ふふ、古いも楽しめるのが僕のいいところさ」

あの日からもう幾十年。

私は変わらぬ姿でお前の隣にいる。見るも無残に老いさらばえたお前の隣に。

お前は気づいているのか？

毎朝お前と顔を合わせるたびに、私の胸が締めつけられていくのを。

「しかし、こう酒がうまいと毎日が幸せだって実感するね」

「なら酒さえ飲んでれば誰だって幸せだな」

「それは違うさ。どんなにいい酒でも、その日その日が楽

しくなきやなにを飲んでも美味しくはないよ。こうしてうまい酒が飲めるのも、それだけ日々が充実しているってことさ」

彼はようやく一杯目を飲み終わると、二杯目をグラスに注いだ。

「それも君のおかげだよ。君との旅は退屈な僕を満たしてくれた。日々変わりゆく君とともに半生を過ごせたことはなにものにも代えがたいものだ」

変わりゆく、か。

私は特別変わったつもりはないが、お前にはそう見えていたのか。

なら、私も変わったのだろうか。

「ずいぶんと言ってくれるじゃないか。年寄りには酔いがまわるのも早いようで」

「…君だからよかったんだ。他の誰でもない、君だからよかった。そう、命がどうかかわらわしくない、退屈な日々にあえいでいた君だからよかったんだ」

二杯目をすぐさま飲み干し、空のグラスに目を泳がせる。

「僕はね、退屈だったんだよ。なにをしてもそれなりにできた。誰と競い合っても負けることはなかった。でもそれは当然だった。みんな命が惜しいんだからね」

誰に語りかけるでもなく、ただ、彼は言葉をつむぎ続けた。

「そんな僕をみんなは気が狂っていると言って、僕の存在から目を背けた。だからあの国を飛びだした。外の世界なら僕を満たしてくれるなにかがあるんじゃないかと信じて。そして、君に会えた」

その顔は、どこか悲しそうだった。

こんな顔を見るのは始めてかもしれない。

「僕の心は常に飢えていた。今でもそうだ。満たしても満たしても満たされない。ずっと心が苦しいんだ。今も、今も」

薄汚れた天井を仰ぎ、目を閉じる。

——もう疲れたよ。

そんな言葉が聞こえた気がした。

「人間は幸せだよ。なにをするにも飽き果てて、生きていくことにすら苦痛を感じる頃には放っておいても勝手に楽になってくれるんだから。でも、君は違うんだらう？」

そうだ、私はお前とは違う。

「僕は君がいてくれ幸せだったが、僕はいつか君になにもしてあげられなくなってしまふ。それだけが、死への悔しさであり心残りだよ」

そうとも、お前は私を外の世界へ引っ張り出したくせに、一人で遠くへ行ってしまう。

まったく勝手な男だな。

——分かっているんだ。

望めば、私はお前を手に入れられる。

お前の命を我が物とすれば、お前を我が血族とすれば。

お前は私と同じ時を生きてくれるだらう。

——分かっているさ。

お前がその事を受け入れてくれることを。

きっと笑いながら、仕方がないなで受け入れてくれることを。

——そう、分かっているんだ。

永遠に続く時の流れの中で、いつかその日が来てしまうことも。

お前が、私と歩む日々を退屈だと感じてしまう日が。

私にはそれが耐えられない。

そのときお前がどんな目で私を見るのか、心に浮かべたくもない。

お前なら、迷いも後悔も己の糧とするのだろう。

それを日々の変化と受け入れるのだろう。

私にはできそうにない。

お前がない私にはとてもできないよ。

おかしいな。

酒を飲んでいるはずなのに、なぜこんなにも心が弾まないんだ。

お前の言うとおりのなら、私が飲む酒はうまいはずなんだがな。

こいつ、一人で言いたい事言ったら酔いつぶれて寝ちまいやがって。

まったく退屈だ。一人で飲んでもつまらない。

ああ、なるほど。

これは飲んでもうまくはないな。飲んでも仕方がないなら寝るしかない。

今が過去になるのなら、それで心が救われるのなら。

明日に丸投げするのも悪くはないか。

理性が魂に灯された光なら、今だけは闇の中に飲み込もう。

そういえば昔言っていたな。

本当に欲しいものが手に入らないんじゃないじゃなくて、絶対に手に入らないものを求めてしまうんだって。

どんな本の能書きよりも、お前の言葉が一番こたえるよ。

↓このAA使おうと思ったのに僕より投稿の遅いルフさんはA
SBなんてしてないで反省してください

